



独立行政法人  
大学改革支援・学位授与機構  
National Institution for Academic Degrees and Quality Enhancement of Higher Education

# 機構ニュース

Vol.236 2023 February

## 今月の記事

### Top News

- 令和4年度 研究開発部研究会について  
..... 1

### 学位授与事業

短期大学・高等専門学校卒業生等を対象とする単位積み上げ型の学位授与関係

科目等履修生制度の開設大学一覧

- 令和5年度版を当機構ウェブサイトに掲載  
..... 2

### 評価事業

機関別認証評価等について

- 評価結果（案）の取りまとめ  
..... 3

### 調査研究

- 研究開発部教員紹介 ..... 4

### 機構の窓

- 新型コロナウイルス感染症対策について  
..... 7

### 主要行事日程

- Schedule（2月～3月） ..... 8

## Top News

### ○ 令和4年度 研究開発部研究会について

研究開発部では、その研究成果を機構の業務に反映させるとともに、高等教育を巡るさまざまな課題、展望を機構の教職員と共有することを目的として、機構教員による講演を中心とする研究会を月例で開催しています。また、折に触れ外部の専門家を招待して話題を提供していただいています。

令和4年度は、以下のようなテーマで研究会を実施しました。

開催月	テーマ	講演者
5月	ポストAI時代に教育はどう変わるか	研究開発部教授 坂口 菊恵
6月	中国の教育-キャッチアップ型教育の終焉？	研究開発部教授 李 敏
7月	位置を知る、ということー屋内測位技術のあらまし	研究開発部特任教授 橋爪 宏達
9月	令和4年度大学質保証フォーラムにむけて	研究開発部教授 森 利枝 研究開発部准教授 野田 文香
10月	高等専門学校機関別認証評価の3巡目中間検証報告と4巡目基準の検討の状況について	研究開発部特任教授 飛原 英治
11月	令和4年10月1日改正、施行の大学設置基準等又は令和4年10月1日の大学設置基準等の改正、施行を考える	研究開発部特任教授・ 研究開発部長 土屋 俊
12月	高等教育の将来像を考える	国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官 研究開発部客員教授 濱中 義隆
1月	コロナ後の国際会議に参加して (1) フローニンゲン宣言ネットワークとオランダの10年 (2) APQN2022年次会合参加報告ー新型コロナウィルス感染拡大後初の海外出張を経験して	(1) 研究開発部教授 坂口 菊恵  (2) 評価事業部国際課 国際質保証連携係 田口 恵里奈、 佐々木 苑子、関口 資子

## 学位授与事業

### 短期大学・高等専門学校卒業者等を対象とする単位積み上げ型の学位授与関係

#### ■科目等履修生制度の開設大学一覧

##### ○ 令和5年度版を当機構ウェブサイトに掲載

当機構では、科目等履修生として学習することを希望する方々が、大学の学部や大学院研究科を選ぶ際の参考となるよう、国公立大学を対象として科目等履修生制度の開設状況の調査を行い、その回答結果を取りまとめた上で当機構の[ウェブサイト](#)で公表しています。

原則として令和5年度の開設状況等について掲載するようにはしておりますが、調査の時点で未定の場合には、前年度の実績を掲載しています。

なお、当機構の学位授与事業に関連して、科目等履修生に対し特別なプログラムを設けている大学や、高等専門学校を卒業後に、専門に関係する学修を継続したい方に向けて、通信教育課程を開設している大学も紹介しています。

## 評価事業

### 機関別認証評価等について

#### ○ 評価結果（案）の取りまとめ

令和4年度の認証評価については、令和4年7月から令和4年12月にかけての書面調査及び訪問調査を基に、それぞれの評価部会において「評価結果（原案）」が作成され、令和5年1月に開催の大学機関別、高等専門学校機関別及び法科大学院の各認証評価委員会での審議を経て、「評価結果（案）」が取りまとめられました。

「評価結果（案）」は、評価の透明性と正確性を確保するため、各受審校に通知され、意見の申立ての手続を経た後、各認証評価委員会において「評価結果」が確定されることとなります。

「評価結果」は、当該受審校及び設置者へ通知され、文部科学大臣に報告されるとともに、「令和4年度認証評価実施結果報告書」として、当機構ウェブサイトへの掲載により、広く社会に公表されることとなります。

## 調査研究

### ○ 研究開発部教員紹介

野田 文香 研究開発部准教授



機構にはご縁があり、2度就職しています。1度目は2010年に立命館大学から、2度目は2019年に東北大学からで、大学とはまた異なる視点で業務や研究に関われるところに機構の面白さを感じています。この度、

自己紹介とのことで自身を振り返りますと、研究者としての下地を形成したアメリカでの修行経験が現在の自分に大きな影響を及ぼしていると感じておりますので、専門分野の高等教育・比較教育的視点もあわせ、アメリカの博士課程での体験を中心にご紹介したいと思います。

#### 脱落者続出のブートキャンプだったアメリカの博士課程

学部時代の交換留学（シアトルのワシントン大学）を含め、6年ほどをアメリカで過ごしました。日本の大学を卒業後、日米比較教育の権威であるウィリアム・カミングス教授のご指導を仰ぐため、ワシントンDCにあるジョージワシントン大学の修士課程（国際教育専攻）に進みました。DCを選んだもうひとつの理由は、国際機関や政府機関、NGO、研究機関などインターンシップの場が豊富にあり、実務経験が期待できることでした。ところがこの読みが甘く、夏になると、全米中からDCのインターンシップへの応募が殺到し、インターンのポジションを得るにも熾烈な競争があったのです。修士課程ではインターンシップが必修科目で、自力で受け入れ先を探さねばならず、何十通もの履歴書を送付してもほとんど返答がありません。インターンポジションを得るにも、より高い学位、専門性、何らかのキャリア経験（インターン含む）、コネクションが必要で、まずは、在米日本大使館の文部科学省広報班でインターン経験を積み、次に米国教員連盟（American Federation of Teachers）へとつながっていきました。博士課程に在籍してからは、ようやく何件か面接に呼ばれるようになり、修士課程と博士課程学生の扱いがこんなにも違うものかと戸惑いました

が、なぜその扱いが異なるかは、自分が後に博士課程を終えてその意味を知ることとなります。博士課程在籍時は、アメリカ大統領選の公約などで全米の教育データとして活用されるシンクタンク（Education Week）の研究調査部門に助手として配属され、アンケートデータの収集のために全米50州の各教育省に電話をかけまくるという苦しいタスクもありましたが、調査結果を執筆した記事を掲載していただいたり、チームでプロジェクトを進める中で、アメリカ人のパワフルかつ丁寧な仕事の仕方、そしてワークライフバランスを重んじる働き方を知るよい機会となりました。

さて、博士課程（高等教育専攻）は、修士課程で求められていたコースワーク課題の質・量・スピードとは明らかに異なり、入学時に14名いたクラスメイトは次の学期で7名に減り、数年後の卒業式では3名になっていました。一般的にアメリカの博士課程は、求める水準に満たなければ容赦なくふるい落とす完全なる能力主義といえます。最初の数年間は、ノイローゼになりそうなほどのインテンシブで難易度の高いコースワークが課されます。終わらない量のリーディングとレポート、プロジェクトやプレゼンテーションと次から次へと溢れ出す課題をこなすのに精いっぱいだった私はただ一人の留学生だったこともあり、ディスカッションをベースとする授業に向かう前は胃がキリキリ痛む毎日でした。特に、いつもにこやかなのに目だけは笑っておらず、厳しい成績をつけるMcDade教授の授業の前夜は夢にうなされたものです。分野やプログラムによりますが、博士課程に入学後、博士論文の執筆資格が与えられる候補生（Doctoral candidate）になるためには、コースワーク修了時に「コンプ（Comprehensive exam）」と呼ばれる進級試験に通らなければなりません。この試験では、毎回3割程度の学生が不合格となり、プログラムから追いつき出されます。私のプログラムでは、知識の定着と応用力、研究遂行能力、論文を論理的に執筆できる力を測るため、コア・コースで学んだ大量の文献・ノートの内容を頭に叩き込み、試験当日はその場で



与えられる複数のケースに対して、一日がかりで論文4本を時間内に書き上げるというものでした。その際、どの書籍で誰が何年に何の理論を主張しているのかを記憶から引き出して引用しながらケースを分析し、ロジカルに論を展開していくことが求められます。さらに、セミコロンやコロンなどフォントの細かい使い方を含め、文献引用のルールを3ヵ所間違えた時点で失格となります。数十冊にのぼる文献内容は範囲と量が多く、とても一人では覚えきれないため、クラスメイトと分担してノートを作り、毎週末公民館に集合して数ヶ月かけて準備対策を行いました。通常のコースワーク課題と並行しての試験準備、さらに英語力の不安で溺れ死にそうになっている私は、クラスメイト達に“You can do it!!”とおしりをたたかれ、なんとか第一関門のコンプ試験をクリアし、博士候補生になった時に日本で職を得て帰国することになります。

### 京都での二足のわらじ生活—立命館大学

博士課程の3年目に入り、あとは博士論文を残すのみ(ABD: All but Dissertation)となったタイミングで、立命館大学で働き始めました。大学教員としての初めての仕事は、初年次教育や教養ゼミ、大講義などの全学科目の授業をもちつつ、大学認証評価やIR、ファカルティ・ディベロップメント(FD)の業務を担当することでした。大規模私立大学には多くの学生が溢れ活気があり、学生FDネットワークの仕事では学生を引率して地方大学を行脚しました。まだ博士課程学生と二足のわらじを履いていたため、今度は博士論文のデータを取る資格を得るために再びワシントンDCに赴き、次なる進級試験(Qualifying exam)を突破しなければなりません。前述のコンプ同様の形式で、今度は自身の博士論文のテーマに即した試験が課せられました。この試験に合格すると、博士論文のインタビューデータを取るため、週末は京都—東京間を幾度も往復しました。インタビュー対象者は人事院の行政官長期派遣制度でアメリカまたは日本の大学院に留学し、修士課程を終えた中央官僚でした。今でいうと、専門職の“アップスキリング”にあたるかもしれませんが、大学院での継続専門教育と仕事との接続をテーマに修士課程でのアウトカム、職場への還元、修士号というクレンシヤルの影響、職業と教育間モビリティの日米比較など、今の機構での業務や研究に関係する内容です。ワシントン

DCには、それぞれの使命と思いをもって官公庁から多くの若手官僚が留学にいらしていました。安全保障を学ぶ防衛省の方、国際関係学を学ぶ経済産業省の方、金融法を学ぶ金融庁の方、環境政策を学ぶ農林水産省の方、法務省、国土交通省、厚生労働省、内閣府、観光庁、文部科学省などアメリカ留学中に知り合った多くの官僚の方々が、帰国後、次々にインタビュー協力者をご紹介してくださり、さらに人事院の派遣担当の方々のご協力も得て、最終的に博士論文を完成させることができました。当時の公務員の方々には今も深く感謝しています。最後に、最終審査のために再びワシントンDCに飛び、全身全霊で口頭試験を終え、合否を決める審議中は教室の外で待機させられました。しばらくして名前を呼ばれ部屋に入ると、5名の審査員が満面の笑みで、“Congratulations! Doctor Noda.”と温かい拍手で迎えてくれました。なんとアメリカらしい、と感激するとともに、とにかく安堵の気持ちで日本に戻りました。卒業式では、ミシェル・オバマ大統領夫人(当時)が目の前で演説をされ、そのスピーチ力が明らかに普通ではなく圧倒されたのを覚えています。その頃に、当機構の公募を見つけご縁をいただき、それから大学機関別認証評価を中心に学術・実務の両面で高等教育の質保証に関わることになりました。



教育大学院の学位授与式

### フランスでの在外経験、東北大学、そして再び機構へ

機構の在職中、ありがたいことにパリでの在外研究の機会をいただくことになりました。実は中高校生時代に描いていた将来の夢は、UNESCOやOECDなどの国際公務員か、国際比較教育の研究者になることで、大学入学当初はアメリカではな

く、フランスの大学への交換留学を目指していました。そのため、学部時代に留学派遣要件の仏検2級を取得しておいたという僅かな貯金もあり、さらに理解の浅かった欧州の高等教育政策事情を勉強したいこともあって、フランスを事例に大学評価や資格枠組み（QF: Qualifications Frameworks）を中心に質保証政策の実態について、研究する時間をいただきました。

その後しばらくして東北大学に移ることになり、幼少期に毎夏を過ごした母の故郷、仙台での生活が始まりました。東北大では、大学教職員を対象に高等教育の高度人材育成を目的とした履修証明プログラムを設計、運用することになりました。履修証明プログラムを受講する社会人は、仕事をしながらご苦労をされて修了書を得るわけですが、この資格が日本の職場（この場合は大学）で、昇進や昇給どころか人事評価の要素としてほとんど考慮されないのはもったいないと感じていたところ、数年後には、履修証明書の単位化やマイクロレデンシャルの話へと発展し、少しずつ状況は変化しているようです。

再び機構に戻り、2019年に機構に設置された国内情報センター（NIC-Japan）で、国際モビリティや学位・資格にかかわる業務や調査研究に携わることになりました。高等教育や社会を取り巻く状況が刻々と変化する中で、1、2年前の情報は既に古くなり、取り組むべき研究課題も先を見据えて多面的に捉えなければならず、日々研鑽の毎日です。

---

のだ あやか Ed.D. (The George Washington University)  
令和元年8月まで 東北大学高度教養教育学生支援機構准教授  
令和元年9月から 本機構研究開発部准教授



ナショナルモールでの卒業式を終えて

## 機構の窓

### ○ 新型コロナウイルス感染症対策について

当機構では新型コロナウイルス感染症対策として、令和5年1月の機構主催の各行事について、以下のとおり対応を行い開催しました。

令和5年1月

開催日	行事名	対応	担当課
19日	大学ポートレート運営会議（第18回）	ウェブ開催	評価企画課
20日	大学機関別認証評価委員会（第2回）	ウェブ開催	評価支援課
30日	令和4年度大学等の質保証人材育成セミナー第3回	ウェブ開催	評価企画課
31日	高等専門学校機関別認証評価委員会（第3回）	ウェブ開催	評価支援課
31日	法科大学院認証評価委員会（第3回）	ウェブ開催	評価支援課



## 主要行事日程

### ○ Schedule

2月

日	行事名	担当課
17日	<a href="#">学位審査会（令和4年度第4回）</a>	学位審査課
21日	高等専門学校機関別認証評価検討ワーキンググループ （第5回）	評価支援課
24日	令和4年9月認定課程修了者（博士（医学））に係る講評	学位審査課

3月

日	行事名	担当課
10日	大学機関別認証評価委員会（第3回）	評価支援課
上旬	令和4年度大学等の質保証人材育成セミナー第4回	評価企画課
11日～ 4月5日	令和5年度4月期学位授与申請（データ入力）受付期間	学位審査課
14日	法科大学院高等専門学校機関別認証評価委員会（第4回）	評価支援課
14日	高等専門学校機関別法科大学院認証評価委員会（第4回）	評価支援課
30日～ 4月5日	令和5年度4月期学位授与申請（書類送付）受付期間	学位審査課



独立行政法人

大学改革支援・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and Quality Enhancement of Higher Education

